

## 焼失家屋は全市街地の五分の一

# 札幌の大火

雪国である札幌は、約半年間、積雪と厳寒の中で生活するため、火気を使用することが多い街です。また、当時は木造<sup>まき</sup>桁<sup>たか</sup>屋根の家屋が多く、今日のような耐寒、耐火の面で弱い構造でした。加えて、春から夏にかけて「馬糞<sup>ばふん</sup>風」と呼ばれる季節風が吹きすさび、特にこの時期、大火が多く発生しました。

大火として最初に記録されているのが、明治二十五年（一八九二年）五月四日のことです。午後九時ごろ、南三西四（狸小路四）付近から出火し、折からの西南の烈風にあおられ、四方に飛び火して広がり、南三条の北側から大通以南、および西五丁目から西二丁目までをたちまちのうちに焼失し、その焼失被害家屋は実に全市街地の五分の一に相当する八八七戸に及びました。

原因は、被災地域の家屋が密集し可燃性建造物が多かったことや、季節風により、飛び火したことが、

さらには消火設備の問題などさまざまな要因がありました。当時の消火設備の主力は人力によると手押しポンプの竜吐水<sup>りゅうとみず</sup>と腕用ポンプ<sup>わんよう</sup>というものでした。また、この大火で裁判所や小学校、警察署など著名な建物も類焼してしまい、市民生活に大きな被害をもたらしました。

翌年には、市内に千戸にも達する空き家がでるほど、札幌の発展は大きく阻害されました。

二回目の大火は、四十年（一九〇七年）五月十日です。午前二時ごろ、南三西一付近から出火し、当初南風にあおられていましたが、急に東南の風と変わり、火の手が二派に分かれて、一方は西に走って西五丁目<sup>にしご</sup>に達し、他方は北に広がって大通にまで及びました。延焼を防ごうと消防隊員は、激しい火勢を突破し、創成川畔から新川に部署を移動して、蒸気ポンプ三台と腕用ポンプ六台を全稼動するなど、全力で消火活動を続けました。その結果、焼失家屋は最初の大火の半数を下回る三七九戸にとどまりました。しかし、深夜のためか五人の尊い人命が失われ、二五人が負傷しました。

その後、こうした経験を生かし、市民一人ひとり



南3西1付近から出火した明治40年（1907年）の大火（北海道大学図書館所蔵）

が防火意識を高め、幾多の努力を重ねて、年々大火による被害は減少しました。百棟以上の家屋が焼失するような火事は昭和二十年代を最後に、札幌の街から姿を消しました。

（平成十六年八月号 第九十五回）